大地物
CORONA
調査報告

「新型コロナウイルス感染拡大に対応する地域福祉施設の現状調査（2 回目）」 について

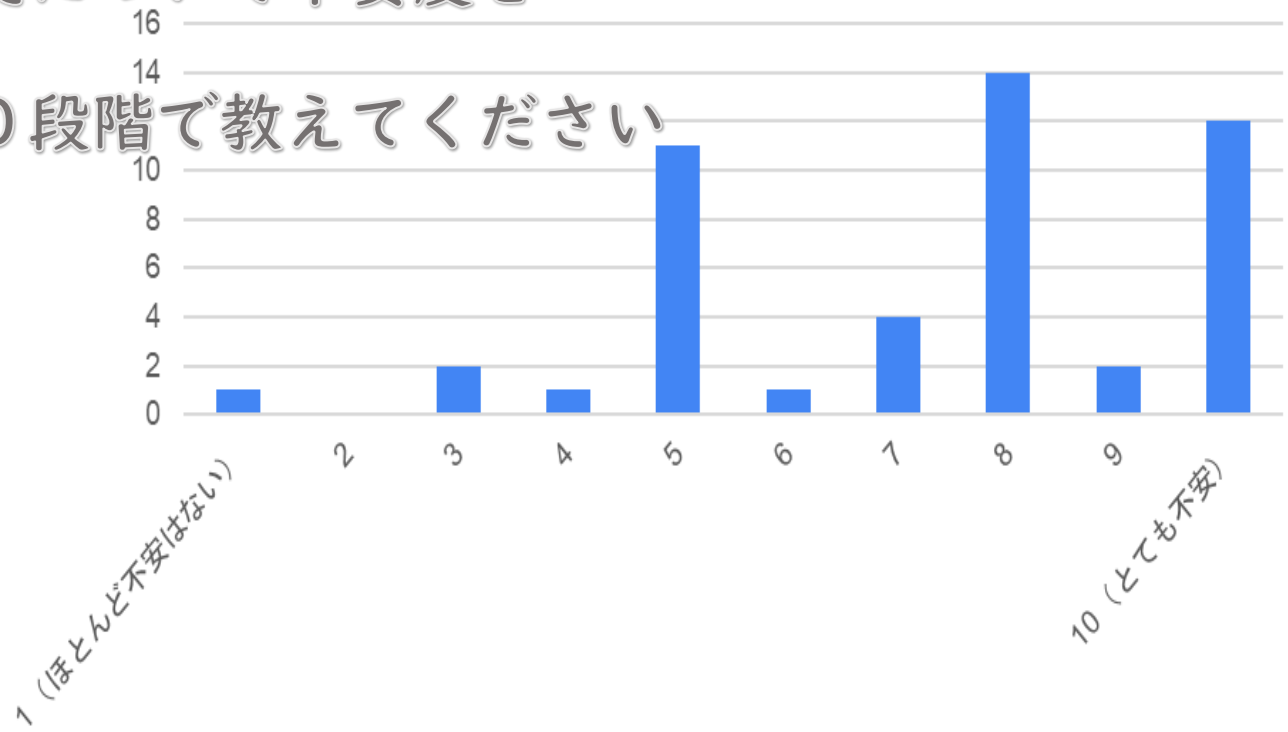
本調査は、昨年度 8 月に実施した「新型コロナウイルス感染拡大に対応する地域福祉施設の現状調査」の継続調査として、「新たな生活様式」の中で生まれはじめた多様な取り組みや前向きな視点を調査することを目的としました。

①人的交流（ボランティア・職員対利用者・職員対家族・職員同士など）のこと、②前向きな意見・声を聞かせていただくこと（やってみたいこと、取り組んでみたいこと、取り入れてほしいことなど）の 2 点を中心に設問を設定し、職員の皆さまが、多くの制限の中で利用者主体を考え、工夫し、実践されてきたことをお聞かせいただきました。

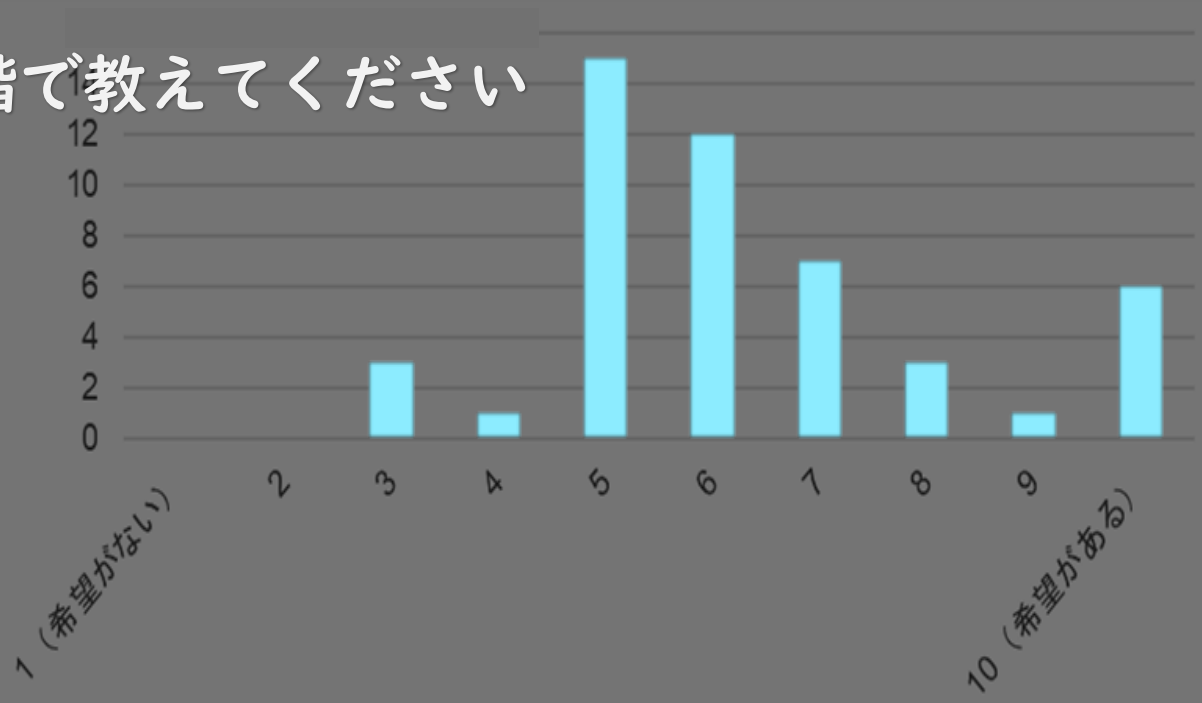
本来であれば、全体の調査報告を掲載したいところではありますが、本ポスターでは、全国研修会のテーマに関連した設問の中から、一部を抜粋して掲載させていただいております。

NPO法人　大阪市地域福祉施設協議会

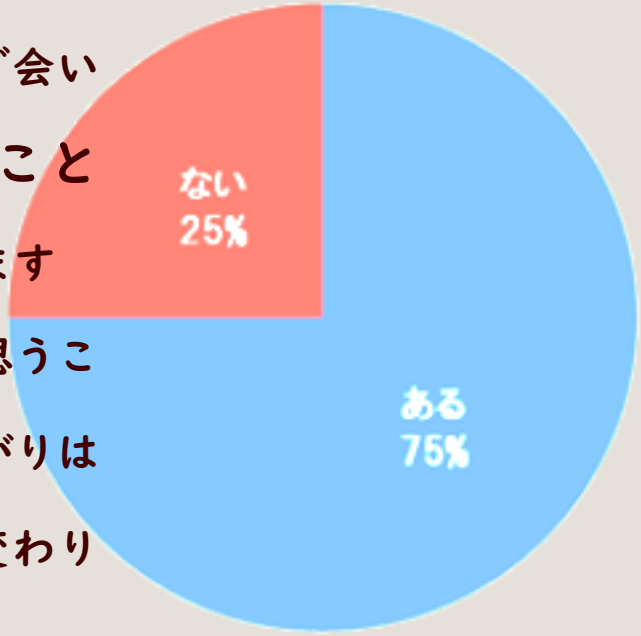
コロナウイルス感染症への対応について不安度を１０段階で教えてください



これからの生活への希望度を１０段階で教えてください



人とのつながりの大切さを、コロナウイルス感染症で改めて実感した、というようなこと（できごと）はありましたか？



コロナ禍を過ごしいかに今まで会いたい時に**自由に会えていたことが幸せ**だったのかを強く感じます

今まで、また今度会った時にと思うことが、これからは、人とのつながりはできる時にしようと考え方が変わりました

食事中の会話が制限される事で、食事の場面が**楽しい時間では無くなってきていること**

昼食の時、黙食をするように子どもたちに伝えています。コロナ禍以前は、楽しく食べようと、食育に力を入れていたのに、黙って食事をして育った子どもたちは**食事を介して人と繋がる**という事がなくなるのかな？などと心配になります。楽しくおしゃべりしながら食事していた頃に戻りたいなと思います。

学生の時、コロナ禍で家族以外の人と対面で喋らないことがあった。その後、家族以外の人と会った時にほっとした気持ちになり、人と会話することが楽しいと感じた。

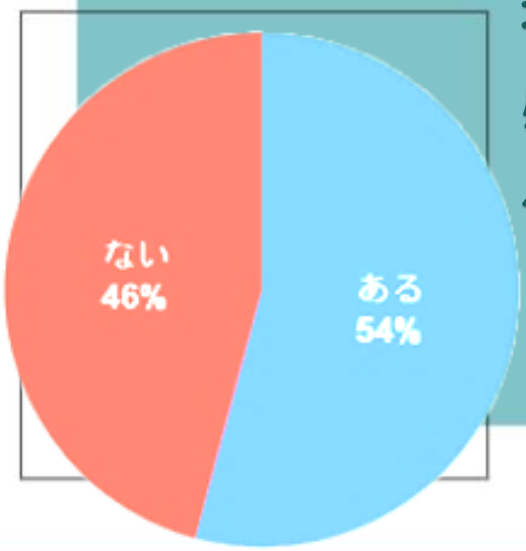
利用者が、「コロナを理由に家族と会えないと、あとどれくらい生きられるかわからないし、忘れられていないか不安」と話されること。

多くの人に支えられていたのだと気づけたから

コロナ禍で大変な中、ご家族やボランティアさんからの励ましの言葉やお手紙などをいただき、救われた気にかけてくださっているということを感じるだけでもありがたかった

リモートでの交流も良いところはあると思うが、食事をしながら等、人との温かさがある交流の大切さが少なく、疎遠になりがちになっている。

子どもたちとの繋がりは表情も多いに重要だと思っていたが、マスク生活の中でも0歳児の子どもたちとの関係づくりが出来たことで**赤ちゃんの力の凄さ**を逆に感じることが出来た



地域に目を向けたとき、コロナウイルス感染症流行前と比べて、何か気になる変化はありますか。

地域行事が減り、地域の方々の様子を知ることが難しくなりつつある。また、街ですれ違っても、マスク越しには顔が分かりにくく、お互いに挨拶をする機会が減ってきている。

お年寄りの方の外出が減ってきて見かけるのが少なくなった気がします
家でどのように過ごしているのか気になったりします

公園で見かける顔ぶれの変化。コロナ前の方はどこに行ったのか？

人と人とのたわいない声かけや関わりが見られない。
落とし物一つ拾うのに躊躇する。

地域のイベントや、小学校、保育園との交流がなくなった
学校などで親が参加する機会がなくなっている

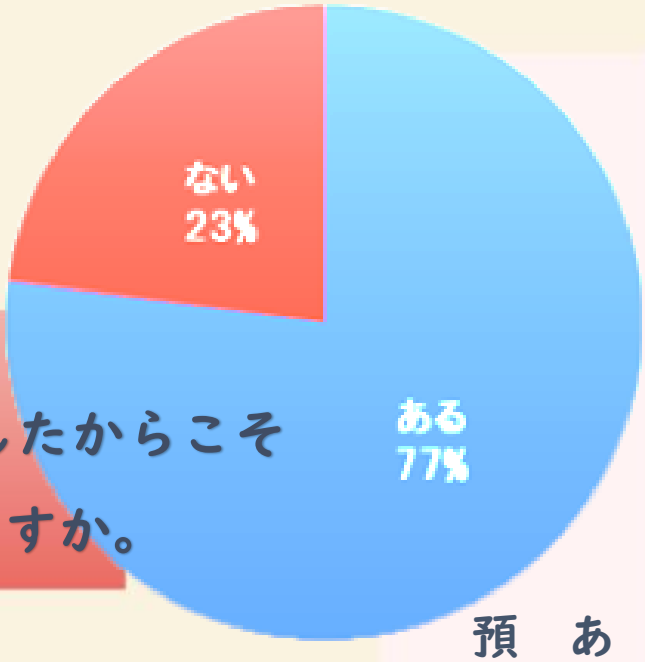
お店が閉まり、歩いている人も少なくなって、街に元気がないと感じる

外出されることを控えて閉じこもりがちになっている方が多くなり、また地域での行事も中止ばかりで、他人と話す（交流する）ことがなくなったという方が増えてきている。

イベントが中止になることで、交流することへの意欲が低下してくるのではないかと感じる

人との関わりがよりいっそう希薄になったと感じる

地域の催しや交流が少なく独居高齢者への支援が遅れている。
人と人との関わりを避けたり減ったりしている気がする。



コロナウイルス感染症を経験したからこそ気付いた、大切なことはありますか。

あらためて、大切な子どもたちの命を預かっている仕事なんだという事。

普通の生活と健康な体のありがたみ

当たり前にしてきた日常生活や人との交流

人にうつされないという意識ではなく、人にうつさないという意識を持つことにより日頃の行動（手洗い、消毒）が変わってきた。

制限されない自由な日常の生活。

直接会えなくても、できることはあるなということ。

感染症にかかった人を責めるのではなく、心配する、人を思いやる気持ちを持つこと。

仕事ができるということ。

心配してくれる家族や友だちがいるということ。

人との繋がり。

保育の仕事があるということ。

地域、

人の助け合い

誤報や、嘘の情報にいかに惑わされずに自分を

保てるか試されたと思う

情報に惑わされない事

人との触れ合いの大切さ、日頃の感染症対策

が見直された

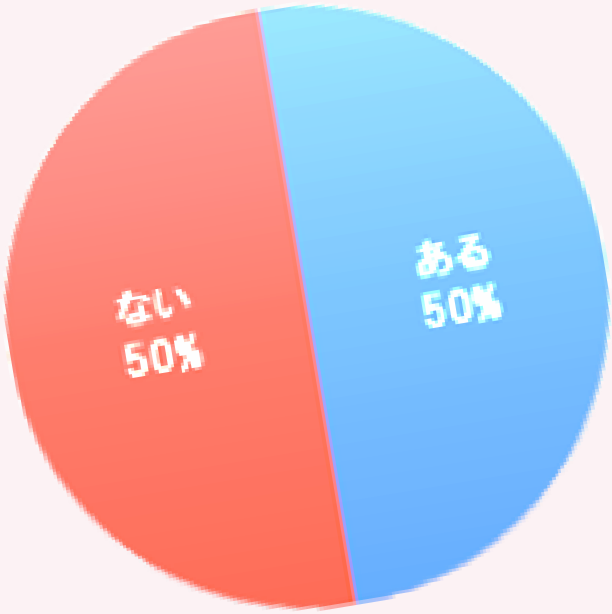
普段何気なくやっていること、感染予防対策

などが本当に大切なんだと体感できたから

人との関わりが当たり前のものではなく

貴重なものになったと思う

直接会えなくても、思いを伝えるということも、とても意味のあることだと思う



今だからこそ
(制限の中でも前向きに)
新たにやってみたいこと、
あるいはすでにやっている
ことはありますか。

今まで以上に子どもや職員と
意識して自分から関わっていきたい
みんなで楽しめるイベントを考えたい

自分から挨拶をしてコミュニケーションをとることを心がけている。
声だけでは口元が見えず相手に伝わりにくいので、手を振ったり、頷いたりしている。

リモートで他の施設の方々と交流し
情報交換をする
オンラインでの他施設との交流

出来る限りのリスクをなくしたいが、コロナ禍がいつまで続くか分からない中、地域との関わりをいかに持つか考えていかなくてはならない
またボランティアの方との交流、やりがいを感じてもらえるよう、
リスクの少ない交流の方法を考えたい

家でいままでやりたくてもできていなかったことをやりたい。

自分の時間・趣味、勉強

TV 番組の一気見

本を読んだり身につけたい習い事をしている。

おうち時間でできる趣味を新たに見つける

自分のスキル向上のために資格を取ろうと思う。

宅トレ

スタッフと入居者の
コミュニケーションを
深くしたい

子どもたちの遊びを充実させる。

家で飼っている犬との時間を大切にする。

制限があるから行事などが減りあわただしさが
なくなった。

日々ゆったりと保育ができていると思う。

これからも一人一人の姿や個性を大切にして、
じっくりと丁寧な保育をしていきたい。

今回で 2 回目となる調査では、職員の皆さんの「前向きな声」を集め、お互いに共有することで、一歩、半歩でも前に進んでいく一助になることを目的に実施いたしました。

しかし、職員の皆さんにご回答いただく時期は、オミクロン株による感染拡大によって、本来の業務すら継続することが難しいような事態に直面する時期と重なってしまいました。現実、回答数も少なく、「それどころではない」という気持ちが本音だと思います。

ただ、その中でご回答いただいた職員の皆さんの「声」は、利用者と日々向き合う中で、利用者のしんどさや辛さを代弁したものであり、また職員自身の、困難な中で少しでも前向きに捉えようと奮闘する当事者としての「声」でもあるのではないでしょうか。

今だからこそ、何ができるのか。本調査で集まった、日常のほんの少しのできごとの中に、そのヒントがあるように感じます。